



《花鳥図》 雲英（下條吟子）



《唐美人図》 雲英 (下條吟子)

3. 雲英女史筆《花鳥図》、《唐美人図》について

花鳥図（図版Ⅳ） 雲英女史（生没年不詳） 19世紀か

絹本着色・掛幅 1幅 法量92.3×32.8cm

落款「雲英女史淑瓊」

印章「下條氏女」（白文方印） 「雲英」（朱文方印）

唐美人図（図版Ⅴ） 雲英女史（生没年不詳） 文政6年（1823）6月

絹本着色・掛幅 1幅 法量94.9×36.9cm

落款「癸未末夏寫 雲英女史淑瓊」

印章「淑」（白文円印） 「淑瓊」（朱文長方印） 「流芳」（白文長方印・遊印）

はじめに

香雪記念資料館は今年度、雲英女史¹筆《花鳥図》（図版Ⅳおよび挿図1）を収蔵した。すでに当館では2010年、雲英女史による《唐美人図》（図版Ⅴおよび挿図2）を収蔵しており、平成23年（2011）の館蔵品展「江戸の文雅 — 近世女性画家とその周辺 —」に出品した。同展の解説目録²では、作者について『安政文雅人名録』（安政7年〈1860〉版）などを典拠とし、長島雲英（生没年不詳）と紹介してきた³。その後も作者に関する事績などは不明のままであったが、このたび《花鳥図》を収蔵し、調査を進めた結果、作者が「雲英女史」を号とする下條吟子（生没年不詳、文政年間頃に活躍）であることが判明した。本稿は、両作品について解説するとともに、雲英女史という女性画家について考察を行うものである。

《花鳥図》

まず、《花鳥図》（挿図1）の基本情報を述べる。柳の木、薔薇とともに、3羽の仄々鳥と思われる鳥が描かれる。柳の樹幹は画面右下からいったん左上へ伸び、「く」の字を書くように右上へと屈曲し、画面から消えるほど伸びる。さらに、細い枝が左上方へと伸び上がる。樹幹には付立により淡い墨でグラデーションが付けられ、一段階濃い墨で所々に節を描き、また樹皮に点苔を施すことで立体感や写実性を出そうと試みられている。点苔は左上方に伸びる細い枝にも少々施されている。柳の葉は、画面上方や、中ほどから下方へかけて枝垂れ、薄い緑色と赤みがかかった色とで若葉からやや枯れた葉への微妙な変化を表現している。

「く」の字に曲がった柳の樹幹の後ろ側には、薔薇が右から左上へと伸び、丸い花卉を付けた桃色の3輪が描かれる。最も大輪の薔薇の左には2つの蕾がなっている。花卉は胡粉を用いて繊細なグラデーションが付けられ、ふわりと花を咲かせる様子が表現される。花卉の中心には代赭により雄蕊を点々と描く。丸みを帯びた薄緑色の葉は、濃い緑色によって葉脈がやや速筆で表される。茎には赤色の棘が細かくかつ鋭く描かれる。

3羽の鳥は、上空から羽根を大きく広げた1羽が急降下する様子が描かれる。その下には2羽が羽根を広げ、かしましく上の1羽を見上げている。右下側の1羽は、両脚をばたつかせている。上の1羽と右下側の1羽は口を大きく開け、舌まで見せている。左下側の1羽は、口をしっかりとつぐんで真剣な表情をしている。鳥は薄墨と薄い胡粉、筆のかすれで羽毛の質感を効果的に表している。また、頭や羽の一部に施された群青が特徴的である。目玉も黒色の上から群青を施している。朱と一段階濃い朱により両脚の表皮を、墨により爪を表現している。

柳は生命力が強く、厄を除けるともいわれている。薔薇は四季を通して開花するため、別名「長春花」ともいい長寿を表す。本図の鳥が仄々鳥を意図して描かれたものであれば、仄々鳥もまた羽根を広げると白い部分が八の字に見えることなどにより吉祥的な意味を持つため、本図は大変縁起の良い画題として制作されたものといえる。全体的に淡い色調で、やわらかさを持ちつつもさらりと表現されており、所々に写実性や質感描写が認められることから、雲英女史が江戸の南蘋風の絵画を学習していたことが窺える。また、総じて速筆である点や写実的な部分が見られることなどから、比較的手慣れた印象を受ける。

画面左側中央には款記「雲英女史淑瓊」とあるが(挿図3)、年記は記されていない。印章は、「下條氏女」(白文方印、1.9×1.9cm)、「雲英」(朱文方印、1.9×1.9 cm)。「下條氏女」(白文方印)という印章から、雲英女史の姓が下條であったことが明らかである。箱書、裏書は見られない。

《唐美人図》

次に、《唐美人図》(挿図2)の基本情報について述べていきたい。欄干に囲まれた邸内の庭に、談笑する4人の女性と、傍らに控える1人の侍童がやや俯瞰的に描かれている。女性たちの左側には、細かく鋭い枝と、点で表現された小さな葉を付けた、背の高い霞がかかった秋冬の木がそびえ、側には月が浮かんでいる。また、所々に落葉した紅葉や、ナンキンハゼのような白い実を付ける木も描かれる。墨により輪郭線が施される箇所が多いのが、本図の特色の一つである。背景には墨線により小さな波が描かれており、この邸内の庭が水辺に面することを示している。

女性たちは中国風の装束をまとった唐美人で、2人は長椅子に座し、もう2人は立ち姿である。長椅子に座す左側の女性は笑みをたたえ、左手に払子を携えて、青色の帙に入った書冊に左腕をもたれさせている。足を崩し、リラックスした様子からも、4人のうちこの女性が中心的人物であることを窺わせる。右側の女性は後ろ姿であり、右裾近くには赤い脇息をのぞかせている。

立ち姿の左側の女性は、左腕を立て顔の近くに手をやり、微笑みながらうなずくような様子、その右側やや後ろの女性は、おとなし気ながら話の内容に関心を寄せる様子が見て取れる。侍童は右手に薬缶を持ち、左手には折り畳んだ赤い布のようなものを抱えて立っている。女性たちはみな一様に細い描線で控えめに表されており、体つきも華奢でやや撫で肩、目鼻も小さく描かれている。一方、装束は大変華やかであり、頭髮には胡粉や緑青の点々による髪飾りが付けられ、衣服の欄や袴、条帛には亀甲に花などの精緻な文様が施されている。

庭の手前左に目を移すと、白い台の上に煎茶碗、茶杓などの道具一式と、青い表紙の書冊が置かれている。右側には竹製で、白い円座の椅子も準備されている。

画面下に描かれる近景には、代赭や緑青を塗り重ね、薄墨や緑で皴や点苔を表した岩山が描かれる。また、赤い実と薄緑色の葉を付けたか細い南天の木、独特な白い葉を付けた木や、笹などが生い茂る。自然の景の中にひっそりと佇む女性たちの私的空間を、鑑賞者がやや覗き見るような構図がとられている。

薄い緑色の付立による柳の葉と南天の葉の表し方、樹幹と岩山の点苔および点による小さな葉の表現やにじみの具合、薔薇の棘と秋冬の木の細かく鋭い枝の描き方などは、《花鳥図》と《唐美人図》とで類似している。

書冊や文房具などを美人の傍らに描く例は、中国・明時代後半から清時代にかけて流行し、日本にも18世紀後半には伝来し制作されたと考えられている。煎茶の道具などが描かれる点も、この時代に好まれた文人趣味に沿ったものであろう。本図のこのような主題から、雲英女史が江戸の南蘋風だけではなく、手本となった明時代の絵画などのほか、例えば『八種画譜』の中の『唐解元倣古今画譜』(1620年頃)における〈仕女図〉や、大岡春朴『画本手鑑』における「外国」の〈婦人〉等の画譜類を学習していたことが予想される。

右上には款記「癸未末夏寫 雲英女史淑瓊」が残る(挿図4)。「癸未末夏」という記述から、文政6年(1823)陰暦6月に描かれたことがわかる。印章は「淑」(白文円印、直径1.3cm)、「淑瓊」(朱文長方印、1.6×1.4 cm)。画面右下に遊印「流芳」(白文長方印、1.5×1.1 cm)が捺される(挿図5)。箱書、裏書は残っていない。

池田冠山をめぐる雲英女史(下條吟子)の絵画制作

続いて、《花鳥図》、《唐美人図》を描いた女性と同一人物と思われる、雲英女史(下條吟子)の絵画を見ていきたい。現存する雲英女史による絵画は、管見の限り2点(うち1点は木版摺)を見出すことができた。

1点目は、文政7年(1824)ないし8年頃にまとめられた《玉露童女追悼集》(浅草寺蔵、台東区有形文化財(歴史資料)、全30巻のうち第7巻のみ欠)に収載される作品である。《玉露童女追悼集》とは、因幡国(鳥取県)鳥取藩の支藩(西館)である若桜藩第5代藩主・池田冠山(定常、松平冠山とも。1767-1833)の末娘(第16女)で、文政5年(1822)に疱瘡(天然痘)によりわずか5歳と25日で亡くなった露姫(1817-22、法名は浄観院殿玉露如泡童女)のために、多くの人々が書画を寄せた追悼集である。

池田冠山は旗本・池田政勝（1709-82）の次男として江戸麹町番町（現在の東京都千代田区）に生まれ、安永2年（1773）7歳で遠縁にあたる若桜藩第4代藩主・池田定得（1754-73）の養子となり、天明5年（1785）に家督を相続した。若い頃より好学であり、儒学者・佐藤一斎（1772-1859）に学び、学問を介して当代一流のさまざまな文化人と交流した。また、『武蔵名所考』（全4巻、文政7年）、『浅草寺志』（全30冊、文政3年〈1820〉）等の地誌、『護法漫筆』（全1巻、文政10年〈1827〉）、『思ひ出草』（全8巻、天保4年〈1833〉）等の随筆など著作も多く、豊後国（大分県）佐伯藩第8代藩主・毛利高標（1755-1801）、近江国（滋賀県）仁正寺藩第7代藩主・市橋長昭（1773-1814）とともに「柳之間三賢」や「文学の三侯」と称されるほどであった⁴。

露姫は幼いながらも観音信仰に篤く、極めて利発な娘であったという。没後、愛用の机の引き出しなどから、自らの死を悟るかのような辞世の句、家族や使いの女性たちへ向けた自筆の書が不思議と次々に見つかった。悲しみの気持ちを新たにした冠山は、49日忌の後、それまでに見つかった遺墨4点を木版摺にし、知友たちに配布した。その反響として、幼い末娘・露姫を亡くした冠山のために寄せられた書画は1636点（うち1点逸亡）に上ったが、これらは松平定信（1759-1829）、水野忠邦（1794-1851）、松浦静山（1760-1841）といった幕府の老中や藩主のほか、佐藤一斎、林述斎（1768-1841）、市河米庵（1779-1858）、屋代弘賢（1758-1841）、酒井抱一（1761-1828）、谷文晁（1763-1841）、狩野養信（1796-1846）ら学者や絵師、俳人、僧侶など、錚々たる面々によるものであった。また、女性による作品が約170点と多く、幼女の追悼という性格上、幼年者による作品が多いことも指摘されている。冠山は露姫の菩提を弔うため、これらを卷子装に仕立て、篤く信仰していた浅草寺へ奉納、現在まで貴重な什宝の一つとして伝来している。

この追悼集の第6巻に、雲英女史筆《双蝶図》⁵（紙本着色、37.3×28.0cm）（挿図6）が収載されている。向かって右から露姫を哀悼する五言古詩「幼画一雙蝶 和歌數紙句 可憐掌上玉 散作夜臺露 齡才享半紀 言自傳千秋 遺筆真悽惻 諷吟泣月樓」が付され、左下に黒揚羽蝶と紋黄蝶が描き添えられている。黒揚羽蝶は墨のグラデーションにより羽根の表裏や脈が表され、桃色と赤色で斑紋が描きこまれている。紋黄蝶は墨で輪郭線を取り、濃彩の黄色が施されている。蝶の胸や腹、脚は墨線により速筆で表現されており、雲英女史の特徴が見てとれる。五言古詩の内容から、黒揚羽蝶と紋黄蝶は、文政7年正月に版行された『応化菩薩辞世帖』（挿図7）内の右上付近に見られる、露姫が兄に宛てた遺筆「おのかみの すへおしら（ず）にもふこてう（おのが身の 末を知らずに 舞う胡蝶）」に添えられた蝶の絵から連想され描かれたものと思われる⁶。雲英女史が絵画だけではなく、漢詩の素養も身に付けていたことも窺い知れる。

款記は「雲英女涕泣拜具」、「涕泣」は涙を流して泣く、「拜具」は「つつしんで申し上げる」の意である。印章は「雲英」（白文方印、1.3×1.3cm）（挿図8）、「流芳」（白文長方印・関防印、1.5×1.1cm）（挿図9）。「流芳」（白文長方印・関防印）は、《唐美人図》の遊印と同一印である。

《玉露童女追悼集》の各々の書画の右上には、筆者不明ではあるが恐らくは冠山の侍者による貼札が付され、本図には「吟子 下條氏」とある（挿図10）。先述の《花鳥図》の印章の一つが「下條氏女」（白文方印）であることから、姓は貼札の「下條氏」と一致し、また雲英女史の名が「吟子」であったことが裏付けられる。《玉露童女追悼集》に上記の作品が残ることから、雲英女史と冠山との交流が看取されるのである。

また、現時点では確証は得られていないが、《玉露童女追悼集》収載の作品から、雲英女史が江戸後期の絵師・鏑木雲潭（1783-1852、没年は1870とも）の弟子であった可能性を挙げたい。雲潭は、名は祥胤、字は三吉、号は雲潭のほか実斎、当左生（尚左生）、通称は祥蔵（庄蔵）。儒学者、漢詩人の市河寛斎（1749-1820）の次男として江戸に生まれる。兄は市河米庵。南蘋派の絵師・鏑木梅溪（1749-1803）の養子となり、画を谷文晁や父・梅溪に学び、江戸で流行した淡い色調の南蘋風の絵画を多く残したことで知られ、当時活躍した文化人の一人であった⁷。

《玉露童女追悼集》第6巻には、雲潭（文政6年〈1823〉ないし7年は41、42歳）もまた雲英女史筆《双蝶図》の8点前に、大輪の牡丹の花の上に2羽の紋黄蝶が舞う様子を表した《牡丹に双蝶図》を寄せており⁸（挿図11）、2羽の蝶を描くという点で画題に共通性が見られる。さらに、雲英女史筆《唐美人図》における「淑」（白文円印）、「淑瓊」（朱文長方印）の形状および並び（挿図4）は、雲潭筆《牡丹に双蝶図》（挿図12）や文化14年（1817）に描かれた《薩埵嶺》（谷立恵太公〈谷斗南〉『東海道名勝詩集』2巻収載、国立国会図書館蔵）に捺される「雲カ」（白文円印）、「祥胤」（朱文長方印）⁹によく似ている。また、雲潭は南蘋風の絵画以外にも、雲英女史のよう

に中国人物画なども描いている¹⁰。雲潭、雲英女史と「雲」の字を共通させている点からも、両者の師弟関係が想起されるのである¹¹。

雲英女史による絵画の2点目は、文政7年(1824)に江戸の弘福寺より版行された『玉露童女行状』(東京都立中央図書館特別文庫室ほか蔵、紙本墨摺、23.0×16.5cm)における露姫の肖像画である¹²(挿図13)。『玉露童女行状』は、池田冠山の命により、家臣の服部遜(脩蔵、叔養とも。?-1847)が考案し、随筆家、雑学者の山崎美成(1796-1856)が書した露姫の逸話集で、漢文体の「浄観院玉露如泡大童女行状」と、仮名混じり文の「六とせの夢」に大別される。巻頭には雲英女史による露姫の肖像画が掲載されるが、その上方には横書きで題字「玉露童女肖像」、右方に縦書きで「源弘賢篆額」とあることから、屋代弘賢が記したものとわかる。次に、池田家の菩提寺である弘福寺の第23世・鶴峰如康(?-1838)による「慈悲仁讓志意和雅」の書に続き、市河米庵の書による冠山の識語が記される。冠山は、この『玉露童女行状』も知友へ配布したという。

露姫の肖像は、向かって左向きに着物姿で正座をする様子が描かれている。袖からはか細い手首がのぞき、小さな両手を腹前で組んでいる。髪型は幼い娘らしく、前髪を裂て蝶結びに飾り、頭頂部に髪を残した「芥子」の部分は髷を結って小さな簪を付けている。また、左耳前には髪を残す「奴」、首元の後ろには短い髪が下ろされた「盆の窪」の形である¹³。髪の生え際や毛先は1本1本細かく表されている。眉は剃られ、一重瞼につぶらな瞳で小さな口をつぐみ、物静かで利発そうな表情である。着物の両肩や両袖には、若桜藩池田家の家紋の一つである祇園守の紋があしらわれ、裾には梅や鶯、帯には立涌文様に柳のような植物文様が付されている。右下には縦書きで「雲英女史敬寫」という署名があり、「雲英」朱文長方形印が捺される(挿図13)。

一重瞼の瞳や小さな口、髪の生え際や毛先を細かく表現する点は、《唐美人図》における侍童や、立ち姿で右側やや後ろに居る女性と似通い、両作品が同一の筆者であることを窺わせる(挿図13)(挿図14)。また、着物に見られる文様の種類が豊富で、細部まで緻密な描き方を見せる点も、雲英女史の特徴が表れているといえよう。

服部遜、山崎美成、雲英女史、屋代弘賢、鶴峰如康、市河米庵はすべて《玉露童女追悼集》に書画を寄せており、特に服部遜は冠山の家臣、屋代弘賢は冠山著『浅草寺志』の跋文も担当、山崎美成は屋代弘賢らと江戸風俗の考証などを行っており、師で国学者の小山田与清(1783-1847)も《玉露童女追悼集》に書を寄せていることから、冠山とも交流があったと考えられる。鶴峰如康は菩提寺の住職で、「六とせの夢」には露姫とおはじきで遊んだというエピソードが記されるほどである¹⁴。市河米庵は冠山と親しく、《玉露童女追悼集》第30巻の末尾は同じく冠山と親しい儒学者・松崎慊堂(1771-1844)、米庵、佐藤一斎で締め括られており、弘福寺の冠山の碑における書も米庵が担当している。また、米庵は先に示した鑄木雲潭の実兄であることも、雲潭と雲英女史が師弟関係であることや、雲英女史が冠山のネットワークに関わっていたことを示唆するものと考えられる。

さらに、すでに小谷恵造氏により指摘されているが、鳥取県立図書館には、冠山の詩軸や書簡などを忠実に筆写した『池田家墨蹟集』全5巻が所蔵されている。1巻目は「陶白堂遺墨集 詩之部」と題され、文政12年(1829)の江戸の大火で焼失したとされる、冠山の詠詩を取めた『陶白堂詩稿』の一部が収載されている。この「陶白堂遺墨集 詩之部」の1丁裏には、「同人家藏 同上[執筆者註：石脇又藏家藏 與其祖父 又左衛門以信] 雲英女畫 桃花之讚」と記され、2丁表にかけて冠山の賛「(関防印「尚古」長方形印) 灼々華開日 緯霞蒸萬井 人間有室家 不必求仙境 冠山(「源常」方印、「君倫」方印)」が書写されている¹⁵(挿図15)。この記述から、雲英女史が描いた桃の花の画に、冠山が賛を付したという事実が明らかである。絵画が現存しないことは極めて残念であるが、この記述により、やはり雲英女史は冠山に会うことが可能であり、冠山と詩画の合作ができるほどの立場にあったと判断できる。

《玉露童女追悼集》に露姫を哀悼する詩および画を寄せ、款記に「涕泣拜具」とも記すこと、『玉露童女行状』の巻頭に露姫の肖像画を描いていることも考え合わせれば、雲英女史が冠山の末娘である露姫とも面識があった可能性も十分に考えられるであろう。想像の域を超えるものではないが、露姫という女子の肖像画を、雲英女史という女性が描く意味もまた大きかったのではないだろうか。

落款の比較

続いて、《花鳥図》、《唐美人図》、《双蝶図》、木版摺ではあるが「玉露童女肖像」と、4作品の款記における共通する字体に焦点を当てる(挿図3)(挿図4)(挿図8)(挿図13)。全体的に見てやや速筆である点が一一致するが、まず「雲」の字形の類似性が目に留まる。1画目は墨をたっぷり付けて筆を下ろし短くとる点、2画目を1画目から離して太めにとる点、3画目の始筆が細い点、4画目はやや右上がり、終筆を角張らせずに左側に跳ねるように省略する点がよく似ている。9画目から12画目の「云」は4作品とも形を小さくしている。

5画目から8画目については、ともに5・6画目を「レ」のように跳ねて表すが、7・8画目は《花鳥図》、「玉露童女肖像」が左下へ短く払うのに対し、《唐美人図》、《双蝶図》は「Z」の形のように繋げている。《唐美人図》は文政6年(1823)陰暦6月、《双蝶図》は文政6、7年頃に描かれたことはすでに述べたが、このような字形や他の2作品より文字全体の肥瘦を意識して書いていることから、制作時期の近さが確かに窺えよう。

「英」は、《花鳥図》、《唐美人図》が草冠部分において2・3画目が1画目を貫くのに対し、《双蝶図》、「玉露童女肖像」は2・3画目を繋げ1画目を貫いていない。4画目以降はともによく似ているが、特に最終画である8画目を7画目から離すように起筆し、払わずに止めている点が似ている。「女」もまた全体の字形が類似し、特に最終画を左から右上がりに長く引く点が特徴的である。《花鳥図》、《唐美人図》、「玉露童女肖像」に見られる「史」の字形も全体的によく似ているが、とりわけ5画目が左上から右下へと長く続く点が共通する。

《花鳥図》、《唐美人図》に見られる「淑」「瓊」であるが、同筆と見なされるものの、「淑」は《花鳥図》が全体の形はより縦長で、傍の部分に筆のかすれが生じることもあり、やや無造作に書かれた印象を受ける。一方、「瓊」は《唐美人図》がより細身で縦長である。《唐美人図》、「玉露童女肖像」に見られる「寫」もまた、1画目の右下がり、2画目の筆の入り方、3画目の右上がり、9画目が6画目を右に突き出る点など、特徴が非常によく似ている。

ところで、南蘋風の画である《花鳥図》は年記がなく、款記の書体が大らかで無造作にも見える。この特徴は本図と《唐美人図》、《双蝶図》、「玉露童女肖像」との制作時期の差を感じさせるが、文字を書き慣れていない若年期のものとするか、あるいはより年齢を重ねた時期のものとするかは、他の雲英女史による作品や一次史料の博搜、画技の習得状況の検討などとも併せ、今後の課題である。

印章に目を移すと、《花鳥図》の「雲英」(朱文方印)は1行につき1字、《双蝶図》の「雲英」(白文方印)も1行につき1字、「玉露童女肖像」の「雲英」(朱文長方印)は縦書きと、3点とも異なる形式の印章が用いられている。《花鳥図》の「下條氏女」(白文方印)、《唐美人図》の「淑」(白文円印)および「淑瓊」(朱文長方印)も、現在までに同一印が捺される他の作品を見出すことができていない。一方、《唐美人図》の遊印、《双蝶図》の関防印はともに「流芳」(白文長方印)で同一印であり、繰り返しになるが両作品の制作時期の近さを窺わせる。

以上のことから、これら4点の作品はすべて同一の筆者によるものと見なすことができる。特に、制作背景や伝来が確かな《玉露童女追悼集》第6巻の《双蝶図》と、当館の2点の作品は字形や印章の一部が共通しており、数少ない雲英女史による作品として相違なく認めることができるであろう。

おわりに

本稿では、雲英女史筆《花鳥図》、《唐美人図》の基本情報を述べるとともに、《玉露童女追悼集》に収載される彼女が描いた《双蝶図》や、『玉露童女行状』巻頭における露姫の肖像画、写本ではあるが池田冠山との詩画の合作の記述について示すことから、雲英女史が池田家とゆかりのある、文政期に活躍した女性画家であったことを指摘した。従来の研究では、雲英女史の作品の詳細や周辺の人物等について迫るものは見られず、これらの点について提起することができた。

また、南蘋風の絵画をよく描いた鑄木雲潭と雲英女史の印章の類似性や、同じ《玉露童女追悼集》に2羽の蝶の画を寄せている点、市河米庵など池田冠山に近い人物たちとの関係などから、雲英女史が鑄木雲潭に絵画を学んでいた可能性を指摘した。執筆者はかつて南蘋派の数少ない女性画家として木村玉英(?-1774)を挙げ、作品解説を行ったが¹⁶、《花鳥図》の存在からも、雲英女史もまた文政期頃に文化の中枢にありながら南蘋風の画を制作した女性の1人として列記したいと考える。

ただし、残念ながら現時点までに雲英女史(下條吟子)の出自や経歴について論じることができなかった。冒頭に、『安政文雅人名録』などに掲載される長島雲英なる女性画家の存在を示したが、雲英女史が後に長島家に嫁し、長島雲英を名乗って活躍した可能性も捨てきれていない。今後は1点でも多くの雲英女史による絵画や関連資料を見出し、江戸文化における彼女のさらなる位置づけを行いたい。

(実践女子大学香雪記念資料館 学芸員 中村玲)

謝辞

《玉露童女追悼集》、『玉露童女行状』、『池田家墨蹟集』の調査および図版掲載に当たりましては、浅草寺教化部 藤元裕二先生、東京都立中央図書館特別文庫室、鳥取県立図書館郷土資料課 中尾有希子様よりご高配を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

註

- 1 雲英女史の落款の一部には「雲英女史」または「雲英女」と記されている。本稿では、より多くの雲英女史作品の発掘を願い、あえて作者名に「女史」を付けている。
- 2 実践女子学園香雪記念資料館編、発行『江戸の文雅-近世女性画家とその周辺-展解説目録』2011年、5頁。
- 3 『安政文雅人名録』安政7年(1860)版には「画 雲榮 高木侯藩 菖谷室 永田馬場 長島雲英女」、『江戸現在廣益諸家人名録』文久元年(1861)および『文久文雅人名録』文久3年(1863)版には「画 雲榮 高木侯藩 菖谷室 築地軽子橋 長島雲英女」とある。森銃三、中島理壽編『近世人名録集成』第2巻、勉誠社、1976年、157、109、214頁。
- 4 池田冠山、《玉露童女追悼集》および『玉露童女行状』については主に以下の文献、論考、展覧会図録等を参考とさせていただいた。
 - ①鳥取県編『鳥取藩史』第1巻 世家・藩士列伝、鳥取県立鳥取図書館、1969年、178-182頁。
 - ②柴田光彦校訂解題「思ひ出草」森銃三、野間光辰、中村幸彦、朝倉治彦編『随筆百花苑』第7巻、中央公論社、1980年、457-461頁。
 - ③玉露童女追悼集刊行会編『玉露童女追悼集』1、金竜山浅草寺、1988年、解題178-187頁。
 - ④森銃三『松平冠山』『森銃三著作集』第7巻、中央公論社、1989年。
 - ⑤小谷恵造『池田冠山傳』三樹書房、1990年。
 - ⑥今田洋三『松平冠山と法華経』、竹内誠『玉露童女追悼集』浅草寺日並記研究会編『江戸浅草を語る』東京美術、1990年、167-179頁。
 - ⑦東京国立博物館編、発行『特別展 美術の中のこどもたち』2001年、82-83、154-155頁。
 - ⑧柴桂子「松平露の六歳の生涯と追悼集によせて」東京桂の会編『江戸期おんな考』第13号、柴桂子発行、2002年10月、107-115頁。
 - ⑨鳥取県立博物館編『特別展 女ならでは世は明けぬ-江戸・鳥取の女性たち』鳥取県立博物館資料刊行会、2006年、56-63頁。
 - ⑩岸本覚著、鳥取県立公文書館 県史編さん室編『褒められた人びと-表彰・栄典からみた鳥取-』鳥取県、2013年、23-27頁。
 - ⑪勝五郎生まれ変わり物語探求調査団編『ほどくほ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書』日野市郷土資料館、2015年。
 - ⑫東京都台東区教育委員会生涯学習課文化財担当編、発行『台東区の文化財』第15集、2017年、21頁。
- 5 玉露童女追悼集刊行会編『玉露童女追悼集』2、金竜山浅草寺、1991年、口絵2頁および17頁。
- 6 文政7年、遺墨を読んで感銘した南勢州(三重県)飯高郡上川の浄林寺の比丘・立寛が世の中の利益になることを願い、同寺より版行された。生前の露姫が残した和歌や句の計6点が筆跡そのままに模刻されている。このほか、文政8年、京都の大本行寺の僧・信暁が『山海里』初編上に露姫の遺墨を取めて発行したり、同年、宮崎成身『視聽草』にも遺墨の刷り物が綴じられるなど、この頃露姫について全国的に知られるようになったという。福井保解題『内閣文庫所蔵典籍叢刊 特刊第2 視聽草』第2巻、汲古書院、1984年、198-200頁、国立国会図書館デジタルコレクション『山海里』初編上、弘業館、1892年、20-24頁。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/820771> (2020年1月7日閲覧)
- 7 鈴木雲潭については主に以下の展覧会図録、文献を参考とさせていただいた。
 - ①財団法人 佐野美術館編、発行『夭折の南画家』1991年。
 - ②板橋区立美術館編、発行『谷文晁とその一門』2007年。
 - ③大村市史編さん委員会編『新編 大村市史』第3巻「近世編」大村市、2015年、676-679頁。
- 8 前掲註5 口絵2頁および14頁。
- 9 国立国会図書館デジタルコレクション『東海道名勝詩集』2巻 [2] <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2553183> (2020年1月7日閲覧)
- 10 《米元章壁書図》(個人蔵)、《孔子像》(大村市立史料館蔵)、大正7年(1918)6月13日『紀州田邊藩主安藤家御藏品入札』における市河米庵賛《三国志》、同8年12月4日『江戸舊家栃木縣某家所蔵品入札』における《蜀三傑・花鳥図》3幅対など。前掲註7 ②79頁。前掲註7 ③676頁。佐々木丞平、佐々木正子編『古画総覧 文人画系』1、国書刊行会、2006年、254頁。
- 11 雲潭の弟子には子・雲洞(1815-92)や、大村藩絵師・山崎雲仙(1796-1871)、飯山藩士で絵師・佐久間雲窓(1801-84)など、画号に「雲」の字が付く絵師が他にも見られる。
- 12 東京都立中央図書館特別文庫室には[和0372]、[和0741]、[和0742]、[和0967]と計4冊の『玉露童女行状』が所蔵されており、挿図13に示したものは[和0372]である。この肖像に倣い制作された《木造玉露童女坐像》も浅草寺に伝来、《玉露童女追悼集》の附として台東区有形文化財(歴史資料)として登録されている。藤元裕二解説「木造玉露童女坐像」浅草寺什宝研究会編『浅草寺什宝目録』第1巻 彫刻編、金龍山浅草寺、2018年、162頁。なお、《玉露童女追悼集》、『玉露童女行状』に関する先行研究において雲英女史について記される場合、《双蝶図》の貼札の記述や露姫の肖像画の落款をそのまま示すのみなど、深く言及されるものは見られない。
- 13 江馬務『日本結髪全史』立命館出版部、1936年、282-285頁。
- 14 前掲註4 ③165頁。
- 15 前掲註4 ⑤259-260頁。
- 16 中村玲「木村玉英筆《西王母図》、《花鳥図》について」『実践女子大学香雪記念資料館 館報』第15号、2018年3月、43-51頁。

図版典拠

挿図7 玉露童女追悼集刊行会編『玉露童女追悼集』1、金竜山浅草寺、1988年、154頁。



插图1 雲英女史筆《花鳥圖》



插图2 雲英女史筆《唐美人圖》



插图3
《花鸟图》落款·印章

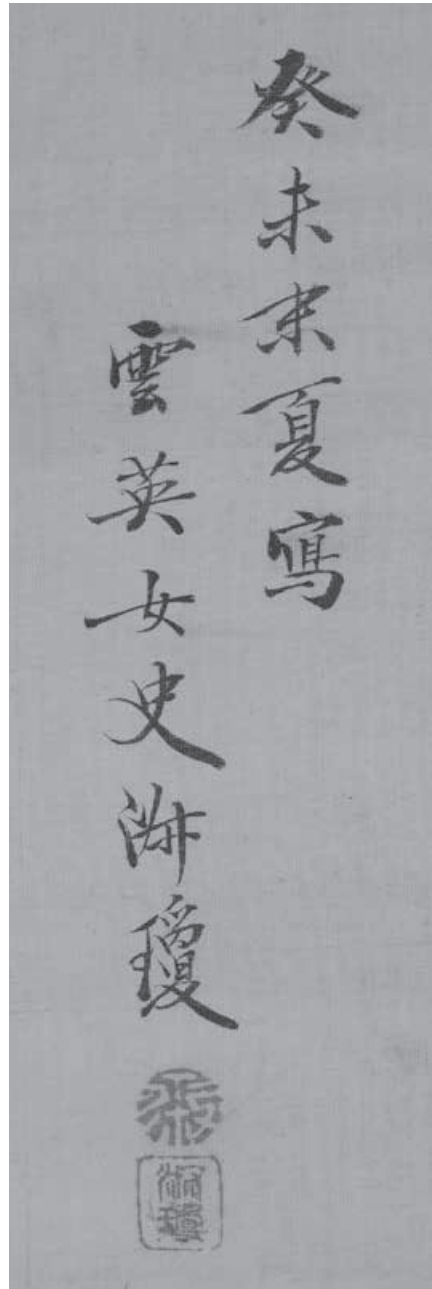


插图4
《唐美人图》落款·印章



插图5
《唐美人图》遊印

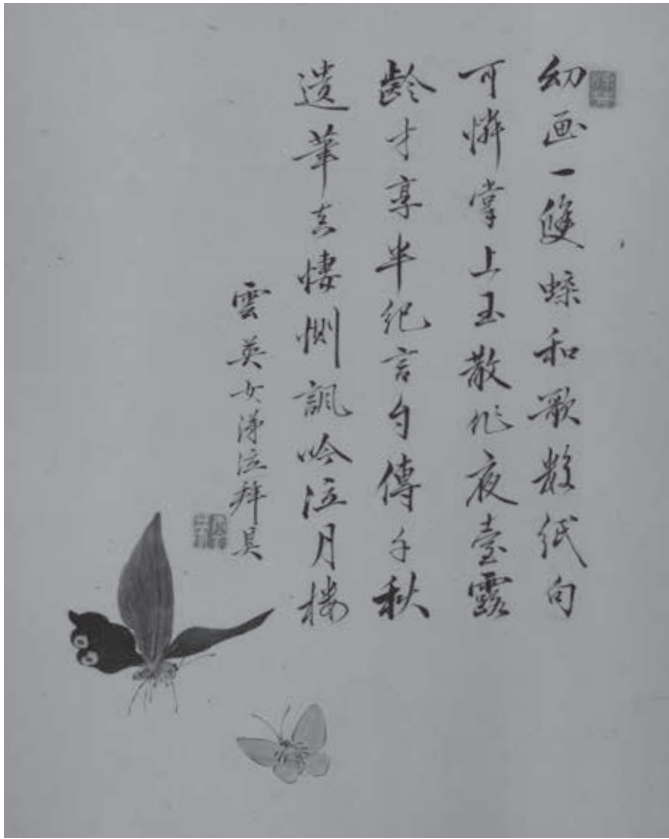


插图6 雲英女史筆《双蝶図》(《玉露童女追悼集》第6卷より)
浅草寺蔵

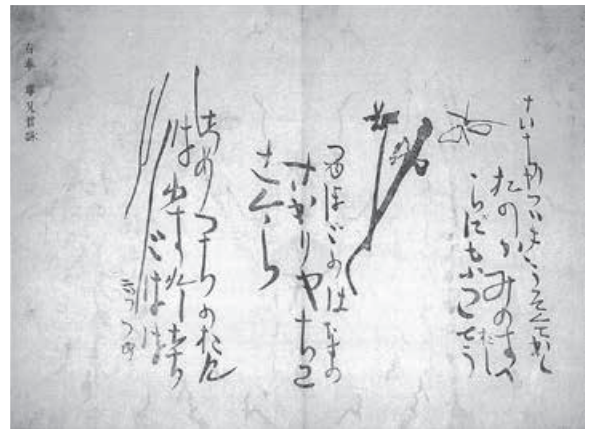


插图7 『応化菩薩辞世帖』

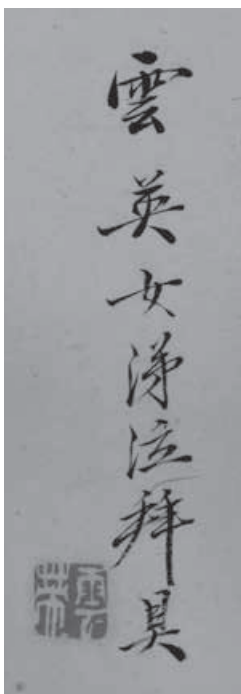


插图8 《双蝶図》
落款・印章

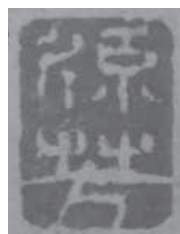


插图9 《双蝶図》
関防印

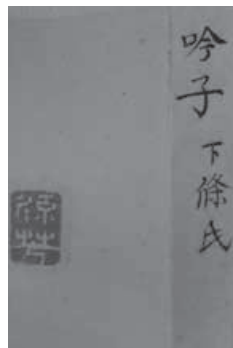


插图10《双蝶図》
貼札



插图11 鑄木雲潭筆《牡丹に双蝶図》
(《玉露童女追悼集》第6卷より) 浅草寺蔵



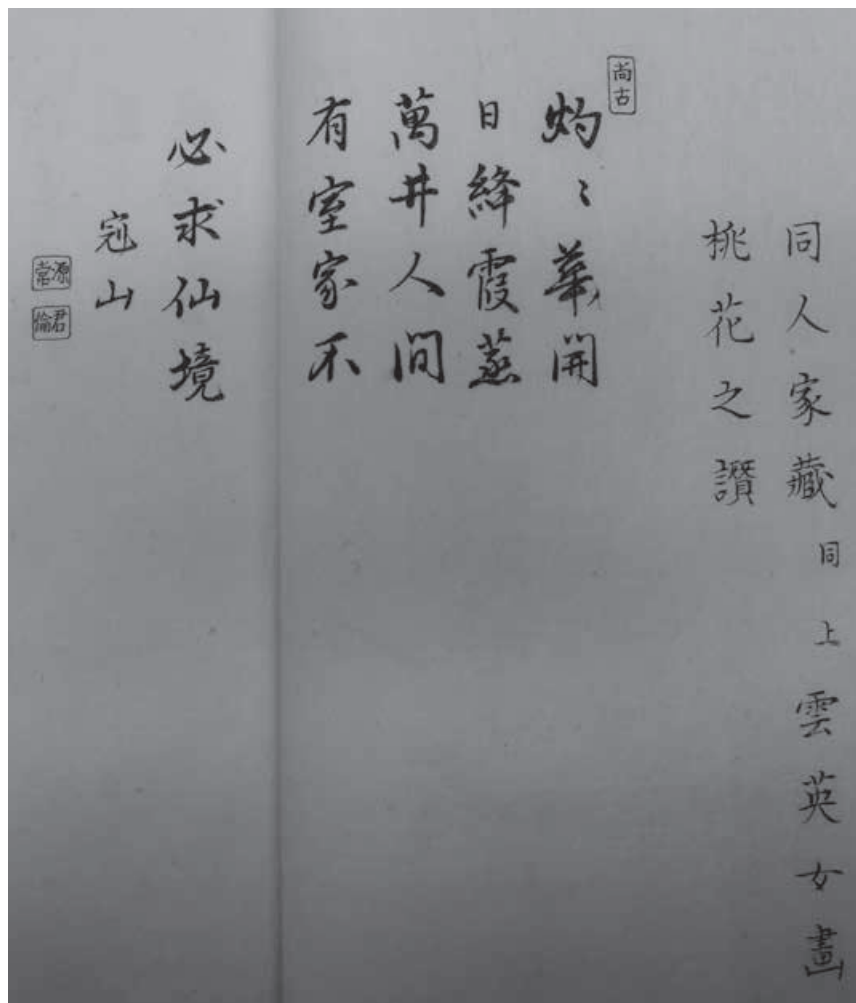
插图12
《牡丹に双蝶図》
落款・印章



挿図13 雲英女史筆「玉露童女肖像」
 (『玉露童女行状』より) 東京都立中央図書館特別文庫室蔵



挿図14 《唐美人図》における侍童および女性の顔貌



挿図15 『池田家墨蹟集』1卷、1丁裏～2丁表(部分)
鳥取県立図書館蔵